

## [059\_05/06] 経済学研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/4492923>

---

出版情報：経済学研究. 59 (5/6), 1994-06-10. 九州大学経済学会  
バージョン：  
権利関係：



## 序 下山教授・逢坂教授の人と学問

この論文集は、下山房雄教授と逢坂充教授との還暦をお祝いするべく、九州大学での同僚だけでなく、お二人と学問上の関係が特に深い学外の方々にも寄稿をお願いして、刊行される。私は同じ学部でお二人と親しくお付き合いして頂いているが、現在『経済学研究』編集の任に当たっており、経済学会を代表してお祝いの言葉を述べるとともに、お二人の学風と人柄について、私なりに記して序とさせて頂きたい。

下山さんは1956年東京大学経済学部卒業だが、修士課程までを東大で済まされた上で、藤本武氏の主宰する労働科学研究所に9年、ついで横浜国立大学経営学部で20年勤務された後に、九州大学に來られて今年で7年目である。マルクス主義は思想であり実践であるという信念に生きる下山さんにとって、学界での経歴は決して平坦ではなかったようだ。その専門は労働問題、ことに賃金論であるが、ともかくドグマに組みせず、事実についた上で理論を組み立てる学風で、実態調査と聞き取りとを精力的にやってこられた。国際比較にも意を用いておられるので、日本ではフランス労働問題の、フランスでは日本労働問題の権威と目されている。下山さんの性は剛直、気も頭の回転も早く、無駄なことはしない人である。そうでなければ、あれだけの業績（本号所載の目録は、下山さん自身の工夫で、自己紹介風になっている）を刊行することは、とてもできなかったであろう。実は私は下山さんと高校以来の知り合いで、下山さんが九大に赴任されてきた当初は、昼飯をともにして駄弁ろうとしたこともあったが、あまりの早飯についていけずに止めてしまった。われわれの学部で評議員も務められたが、横浜時代の賃金関係の委員を含めて、労働界の現場での仕事を沢山こなしておられる。

逢坂さんは1953年に九州大学経済学部に入學されて以来、熊本商科大学に勤務された5年間を除いて、ずっと九州大学で過ごしてこられた、いわば生粋の九大人である。しかも、長くマルクス経済学の研究で聞こえた経済学部で経済学原論講座を担当されており、まさにわが学部を代表する研究者であり、マルクス経済学の見地からする経済動態論の展開に力を尽くされてきた。主著である『再生産と競争の理論』や『経済学研究』に発表された論文では、鋭い発想から、論理の整合性を重視した議論を組み立て、吟味の行き届いた文章に、時には寸鉄人をさす表現を交えて展開されている。日頃接している逢坂さんは、まことに悠揚迫らぬ風格で、穏やかな語り口にはたくまざるユーモアがある。逢坂さんの主宰する会議は、いつ終わるのかと心配になることもあるが、難しい問題でも静かに解決されていくことが多い。評議員など大学行政の仕事もこなされ、福岡県の行政改革の審議会長を務められたこともあったが、最近の瞠目すべき業績（御本人は遊興事だと言っておられるが）は、学内緑化運動のイニシアチヴをとって、無味乾燥であった文科系キャンパスに、一筋の並木道を完成させたことである。残念ながら、あの木々が大きく育つ前にキャンパスは移転してしまうが、いましばらくの間は逢坂さんの創った緑がわれわれの心を和ませてくれることだろう。

下山さんと逢坂さんとは、こんな風に、経歴、学風、人柄のどれを取ってみても、まことに対照的な方々である。このような全く違ったタイプのマルクス主義的研究者を擁することが、わが学部の強みでなくて何であろうか。九州大学経済学部が長く打ち込んできマルクス経済学が、学生諸君の強い無関心に象徴される逆境の中で、何か新しい展望を見出さなければならぬ現在であるだけに、お二人がなおいっそう研究に精進されるよう、期待してやまない。

1994年3月

九州大学経済学会長

森 本 芳 樹